

# 星野空外絵画資料・整理報告 2 ー大正期・南紀写生

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 京都市立芸術大学芸術資料館 公開日: 2022-11-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大須賀, 潔 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15014/00000432">https://doi.org/10.15014/00000432</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.



## 星野空外絵画資料・整理報告Ⅱ — 大正期・南紀写生 —

大須賀 潔

明治44年3月の京都市立絵画専門学校第一回卒業生である星野萬次郎（明治21年—昭和48年）は、空外の号で在学中から文展に出品、第7回文展では、三等賞も得ている。当時の学校仲間による研究団体にも参加して、京都では、将来ある青年画家として期待を集めた一人であった。よく知られている『国画創作協会』は、同じ第一回の卒業生たちによる評価の高い新日本画運動であった。空外は、そこには参加せずに、また別の画家としての道を歩んだ。しかし、文展や帝展で活躍しながら、空外は大正期後半の頃から画壇を離れた生き方を選んでいったのだが、終生一人の画家として生きたことは、残されたたくさんの写生帖から証明されることである。幼少から最晩年までの写生類が一括して保存されていたので、それを調査・整理することによって、『国画創作協会』の仲間とは別に近代日本の特徴的な時代を生きた一人の画家をめぐる、絵画制作の本義的な意味を考える機会を得たいというのが、今回の整理報告のもうひとつの願いである。今回は前回の明治期に続く大正期の写生帖をまとめた。

主要項目；星野空外、文展、帝展、勝浦、塩津、写生帖

---

### A Research Report; Kūgai Hoshino's Sketches and Drawings —Taishō Era and Sketches around South Kii Peninsula—

By KIYOSHI OHSUGA

Manjiro Hoshino (1888-1973), his artist name is kūgai, graduated at the Kyoto shiritu Kaiga Senmon Gakko (Kyoto City Specialist School of Painting) as one of its first alumni in 1911 (Meiji 44th year). Since then, the specialist school that is named Kyoto City University of Arts at present have produced a great number of good artists under traditional education by many prominent artists in Kyoto. It was admirable and high-estimated event that the famous “KOKUGA-SOUSAKU-KYOKAI” movement, which profoundly influenced modern development of NIHONGA (Japanese style painting), formed by the first graduate members. Actually Kūgai Hoshino do not participate in the movement and take a different way of art-life.

Nevertheless he also start as a talented young artist same as other the first alumni, we can not say he succeed in modern NIHONGA world. But he had made a plenty of sketches and drawings throughout all his life, which is donated to our university. This is the second research report of those pictorial description, just the parts of Taishō era continued from the former report Meiji era. With this investigating, We will find an artist who live his own original art-world that lead us to think over the true sense of being artist.

Key Terms; Hoshino Kūgai, Bun-ten, Tei-ten, Katuura, Shiotu, Sketches.

## はじめに

京都市立絵画専門学校を卒業する頃の星野萬次郎空外は、学校教育による京都日本画の伝統的な技法を身に付け、様々な画題を描きこなすなかでも、卒業作品がそうであるように風景への興味は強く数々の写生表現にも真剣な取組み様と巧みさがうかがえる。その一方で、当時若い世代に人気を博していた竹久夢二の世界に少なからず傾倒していたのではないかと思わせる写生も数多くある。前回の整理報告でも確認したように日常生活に見る人物点景の即興的な活写などには、空外の人物表現への関心も、イラストレーション風な雰囲気のものではあるがそれなりに深いものがあったように思える。その意味では、仮に空外が洋画へと転向するか、日本画以外の領域で人物なり社会風俗的な画題の制作を試みたとすれば、また別の星野空外が生まれてくる可能性は十分にあったのではないかという印象がする程である。

そのあたりの素顔の空外の関心事の周辺を推察できる材料に空外自身による新聞の切抜き帖がある。写生帖ではないので整理報告の中に数えることはできないけれども、木綿布貼りの厚紙表紙に墨で『さし絵集・三号』と表題された切抜き帖には、新聞に掲載された和田三造の巴里スケッチ（明治42年）や小杉未醒の挿絵（数としてかなり多いので空外が好んだ作家であった様子が窺い知れる）、或いは大正9年の第二回帝展の出品作品など、色々な作家の挿絵や作品図版が台紙代わりの新聞紙に貼りこまれている。裏表紙には墨で椿の絵が装丁され墨書「辛亥冬日／空外作」とあるので、明治44年ということになる。台紙の新聞紙も明治44年から45年の大阪毎日新聞か大阪新報が使用され、切抜きの中には今は散逸して実物を見ることができない近代画家たちの小品図版もあるので、切抜き帖自体にも資料的価値がある。ここに空外自身が描いた新聞挿絵の切抜きも数多く残されており、当時の空外の日本画制作以外の仕事内容を知ることができるのが大変に興味深い。

記事の見出しはなく出典も不明であるが、『着色手法の凡ならぬ田中善之助、挿畫にかけて此邊で匹儔のない星野空外、才気奔放を稱せらるゝ澤部清五郎、天性偽り得ない描写に没頭する千種掃雲』（下線筆者）という一節のある切抜きもあって、絵画専門学校卒業後の大正期の空外の世上の評価の一端が示されてもいるのだが、事実、切抜きに残された空外の大正初期の挿絵には、無論そればかりではないが、夢二風なロマンチックな風情濃い女性の当世好みの図様が多かったりする。さらには、『熊野浦スケッチ帖』とされた34図に及ぶシリーズや100～300字の随想も添えられた『御坊町の思ひ出』（空外が南紀御坊を訪れたのは大正7年7月）の12図のシリーズもある。

大正2年の第7回文展出品の『春』が三等賞を得た時の新聞記事の切抜きもあった。空外の当時を想像する資料にもなるかと思われるので紹介しておこう。掲載紙と日付けは不明である。

『星野空外氏は年26（23の誤り）の青年画家にて居を伏見に構えて窮乏と闘いつ、研鑽を怠らざるが極めて藝術家的肌合の男にて往々奇行を演ずることあり曾て京都絵画専門学校を卒業の際学校の処置に就き何か癪に障った事があったとて卒業證書を返上に及びソんな物は藝術家の資格に必要でないと空嘯きたるなど其一例なりトンと風采に頓着せ（欠落）たなどの滑稽もあり、氏は今度入賞せる「春」の製作に就て語るよう「今年の春睡眠不足のポツとした頭を抱えて美豆の桃畑を散歩すると桃花の暖かな色彩が妙に強烈な刺激を僕に興へたので何時か此気分を描いて見やうと思ふた、ソレから間もなく九条邊の一牧場で羊が青草の上に寝轉びながら反芻して居るのを見たが如何にも其面相が春の風情に適はしいので此二つの材料を結びつけて描いたのが今度の出品であります、どちらかと云えば随分大膽なやり方

なので何うせ落選物だらうと思って居たに三等賞とは一寸驚きました。自分の自信が貫けたのは何より嬉しく思ひます」とガランとした廿何畳敷の畫室に胡座を掻きながら無邪気な笑を漏らす傍には蜜柑箱を二つ並べて机の代用とし洋酒の空瓶には盛りのコスモスが挿まれてあるなど何處までも簡單なり』

記事には空外の自画像イラストも添えられており、しかも裏返し印刷になっているのがいるのがまた面白いが、写生帖の所々に散見される空外の謙虚で内省的な文章に接している限りでは、新聞記者が書いているような奇行のある芸術家肌というのは、そのような人にはなかなか想像できず、また談話についても言葉どおりであるかは確証もなく意外の感が強い。

そのように絵専を卒業してからの星野空外の周辺は、文展に入選歴を持つ将来ある作家として話題豊かで画家仲間との交流もあったようである。今回の整理報告は、空外のそうした文・帝展作家時代でもある大正期の写生帖を中心にしてはいるが、大正期と推定されるが確定できないものは除外したのですべてを整理できてはいない。さらに前回の整理から漏れた明治期のスケッチ類も少なからずあり、昭和期から戦後、没年までという空外絵画資料の総括的な整理にはまだまだ相応の日数を要する。しかし、現時点での限られた範囲内においても、大正期に入ってから星野空外の作家的個性が写生の端々に見えてくるように思える。それで画集を作るほどではなかったようだが、前述した夢二風な抒情味豊かなロマンチックな挿絵を描いて売っていたことなどもそのひとつであった。空外の明治期の美工・絵専という学生時代の写生帖には、熱のこもった真面目な写生のそれぞれに時代の美術教育の息吹とそれを吸収しようとする純情青年の面影を感じることができた。それは写生そのものからというよりも、その間に書き留められた心情吐露の述懐の文章から青春の陰影のように読み取れたものであった。

或いはまた、そうすることを好んだのか、学生時代から努めて戸外に出て写生をし、近隣へ遠出の写生に出かけていたこともしばしばであった。大正になってからは、学校の授業などに拘束されることもないからか、遠出の距離もいっそう伸び知人宅に逗留すれば長期にもなっている。大正期で目立つのは、紀伊半島海岸の勝浦町や御坊町、塩津港、熊野などの紀南滞在である。従ってそれに関連する写生帖の数も多いわけだが、かならずしも文展などの出品制作に反映していない部分もある。写生帖からでは詳しい事情は読み取れないが、母親が空外の帰ることを望んでいないので、兄からの帰京を促す声にも従わないでいる気持ちを書いたメモもあったりで、何度かの長期滞在は写生や勉強のためという他に別の理由があつてのことのようにも思われるふしがある。ただ少なくとも滞在のひとつの成果として見るべきものに、『塩津画卷』の写生がある。これが画稿のままに終わったのか、完成作品があるのかは今も不明だが、いずれにしても塩津港の写生画卷は緻密な構成の力作画稿というべきものである。

今回は、それらを初めとしていくつかの写生帖の部分図版を紹介している。大正期としてはっきり明記されているものは、前回の整理報告では二巻の『塩津画卷』を含めて20冊であったが、手帳も入れて24冊になった。現在のところは、大正7年から11年と大正13年から15年の期間がなくて恐らく20冊ほどは抜け落ちていと推測するが、ご遺族に別に保管されている写生帖もあるようなので、いずれは調査記録を作り整理報告に補足していきたいと思う。

なお、写生帖に書き込まれている日付は漢数字であるが表記上算用数字に変えている。

- 1 『文展作構想』 大正元年 24.4×32.6cm 和紙 31紙、右糸綴じ  
表紙（和紙）、墨書「大正元年十二月／玉水長池石山桃奈良」  
「寫生帖大正元年の冬空外」  
裏表紙（和紙）、墨書なし  
1/2枚目 南天墨写生  
3枚目 土手の風景墨淡彩写生、墨書「12月20日」  
6枚目 家と松の墨写生  
9枚目 風景墨写生、墨書「1月14日／近江南鄉村」  
11/12枚目 第7回文展入選作の「春」の小下絵ふうな草稿が13/14枚目にも続く。入選作は四曲半双であるが、これによると初めは四曲一雙で構想されていたのが分かる。  
12枚目 墨書「4月8日」の墨淡彩の桃の木の写生  
17/31枚目 寺の門や塔、集落風景、集落の道の墨写生などが続く。表紙に墨書されている奈良での写生と思われる。  
この写生帖は、大正元年冬から2年の春に使用されたもので、文展出品作の初めの構想が興味深い。
- 2 『文展作写生』 大正2年 33.5×24.6cm 和紙 56紙、右糸綴じ  
表紙（和紙）、表紙裏に写生の切り張り、墨書「美豆の桃／山羊／和歌山縣二里ヶ濱／立葵／白百合／無花果」「寫生帖／大正二年はる／星野空外」  
裏表紙（和紙）、墨による人の顔、墨書「大正二年春／星野空外」  
裏表紙裏に墨書（天地逆様に）「大正三年之夏」  
1/15枚目 文展出品作のための桃の木の墨写生。4月16日のもの。  
18枚目 雛雀の墨写生。  
19/26枚目 同じく文展出品作のための山羊の墨写生。  
27/38枚目 29枚目に墨書「5月12日／二里ヶ濱」の漁船墨淡彩写生  
他に、浜屋、夜の松並木などの墨写生がある。  
40枚目 天地逆様に墨書「7月4日」の植物墨淡彩写生。  
44/56枚目 45枚目に墨書「6月23日」の立葵の着彩写生、続いて同じ日に白百合三図、無花果の着彩写生見開き三図など。  
最後の36枚目に墨書「6月18日夏」があるので、後半は大正3年の夏に後ろから使用していると思われる。
- 3 『桃花山羊』 大正2年 18.5×27.5cm 洋紙 24紙、右綴じ  
表紙・裏表紙ともに厚板紙の市販のスケッチ帖、裏表紙に墨書「大正二年春／星野空外」  
3/5枚目 色鉛筆による彩色の古画写しなど。  
6/12枚目 色鉛筆淡彩の桃花の写生。  
13/15枚目 鉛筆による山羊写生。  
21/22枚目 鉛筆淡彩の男性の顔写生、鉛筆書「5月7日の夜」  
2枚分の破り捨てがある。男性の顔写生は左右の瞳の位置から空外自身の自画像とみていい。  
このスケッチ帳の桃花と山羊は、空後の後日の新聞談話によれば文展作の「春」を制作する動機となった写生と見られる。その構想が和紙の写生帳に展開されている。
- 4 『挿絵女性』 大正2年 14.5×19.0cm 洋紙 29紙、左綴じ  
表紙・裏表紙とも（市販のスケッチブック装丁厚紙）墨書なし、裏表紙裏に墨書「星野空外」、

表紙中紙に鉛筆書「東雲町二丁目玉造郵便局東横／晩花君」

- 1 枚目 鉛筆書「明治45年7月17日榎原千代子」の鉛筆の洋装女性
- 2 枚目 青色鉛筆による着物女性、以後青色鉛筆や鉛筆による人物写生、女性の顔、とうもろこし、などが使用方向まちまちに描かれている。
- 13枚目 天地逆様に鉛筆書「大正2年／12月9日／新和歌浦にて」の舟の鉛筆写生
- 15枚目 鉛筆書「秋の桃山陵／9月12日／宮内省／山本技師に／案内／せら／れて／新宮／社員と／して奉／拝す」

以下鉛筆や赤鉛筆による主に女性の夢二風な絵が数図ある。芸子の写生もあり、里千代の名も書き込まれている。他に榎原辰己の署名のある色鉛筆による絵もある。榎原千代子と榎原辰己は、榎原紫峰の妹と弟にあたる。紫峰との交流の様子が想像される。

5 『古画模写・新宮』 大正3年 24.5×33.7cm 和紙 68紙、右糸綴じ

表紙（和紙）、表紙中央二つ折の虫食い傷みを補修。墨書「大正三年三月」「寫生帖」、ペン書「寫生帖大正三年春正月／下鴨にて此を作る／空外」裏表紙なし。

- 3/5枚目 墨による白衣観音、法界寺の飛天、などの写し。
  - 7 枚目 墨書「能阿弥筆」の水牛図の写し。
  - 9 枚目 浮世絵の着彩写し。
  - 10/11枚目 観音図の手、足、顔などの着彩写し。
  - 14/23枚目 さぎや五位鷺の鳥、中国人物など古画からの墨写し。
  - 24/41枚目 山鳩、烏、鶏、せきれい、うそ、鷺など数種の鳥の着彩写生がまとめられている。
  - 42枚目 ムンクの作品の縮図、墨書「DIE EINSAMEN/MONCH」
  - 44枚目 墨書「湯ノみね／東屋ニテ／3月18日／塩吉内／花」
  - 45枚目 墨書「新宮町／塩吉内／花」「大正3年3月18日」
  - 48枚目 墨書「大正3年4月3日／桃山にて寫生」、木蓮着彩写生が五図続く。細部の調子を考慮せずに全体を柔らかな線描でまとめている。
  - 53枚目 墨書「3年4月10日」の桜花の着彩写生、54枚目も同じ。
  - 58枚目 墨書「5月14日／青岸にて」の松着彩写生。
  - 59枚目 墨書「淡輪／5月17日」の海岸風景淡彩写生。
  - 67枚目 墨書「菩提樹」の葉の着彩写生、直接の転写もある。
- 様々な日々の写生や写し、漫筆ふうな人物風景もあって、捨ててもいいようなものまでが綴じてある。そうした意味では日記のような感覚で後日整理してまとめた写生帖というふうに見える。

6 『植物・女性』 大正3年 24.3×33.0cm 和紙 48紙、右糸綴じ

表紙（和紙）、墨書「寫生帖大正三年なつ七月描き印空外」

裏表紙（和紙）、墨書なし。

- 1/4枚目 7月5日の植物墨淡彩写生
- 5/19枚目 同じく10日までのヒメジオンなどの植物墨淡彩写生
- 20/24枚目 鉛筆による女性人物のスケッチ
- 25/31枚目 墨による女性の手、足のスケッチ、顔は描かれてない。
- 32/35枚目 墨植物寫生、34枚目に墨書「8月28日寫生」
- 36/37枚目 墨によるホルスタイン種牛の写生、9月1日のもの。
- 39/40枚目 墨書「無花果／10月4日」の墨淡彩写生。
- 41/42枚目 10月26日の紅葉の墨淡彩写生

7 『乳牛』 大正3年 20.4×14.5cm 洋紙 50紙、右糸綴じ

表紙、裏表紙共（洋紙・既成市販ノート）、墨書なし、

1枚目 墨書「大正3年夏7月／乳牛／空外」

2枚目 鉛筆書「7月9日」、ペン書「近藤牧場」

以下50紙全部の裏表を使用して墨淡彩、鉛筆によるホルスタイン種の乳牛の頭部や脚部、全体など様々の角度からの写生でまとまっている。素早いスケッチと綿密な淡彩写生とあり、少なくとも11日まで2～3日間のうちに使用された写生帖になっている。

8 『勝浦滞在メモ』 大正3年 18.4×12.8cm 洋紙 52紙、右綴じ

表紙（洋紙）、墨書「大正三年／十二月」、表紙裏に12ヶ月の出席表が印刷されている藁半紙無地のノート。

裏表紙（洋紙）、裏に年間の祝日、授業時間割一覧表の印刷。

5枚目 鉛筆書「11月11日」の樹の鉛筆ラフスケッチ

以下、牛や鶏の簡単なラフスケッチが所々あり、木の本のメモも見えるので、大正4年2月の勝浦滞在に関連すると思われる。全体はスケッチというよりは、走り書きのメモのようなもの。芸者の図に小蝶の書き込みもある。

39/49枚目 判読不能の長文の鉛筆による下書きのようなもの。46枚目から鉛筆下書きの上からそれとは関係なく墨書がある「○こしらえては捨てる／樹木が成長していく上に既に役／を果たした枯葉を落す如く／人もまた垢を落とし髪をきり／爪をきることがあり綿入を脱いで袷に着更へることもある／それはみな成育してゆく上に既に／に不必要になったものを取去って／ゆくのであろう我身に不必要に／なったものをいつまでも離さず／に持っていることは真違った心いき／ではなかるうか次第次第に捨てて／ゆくのが本當のように思うそ／れは意識して取去るのと只成／行に任せて見向かないのとどち／らがよいであろうか蜂が苦しし／て作った巣や蜘蛛が作った／囿はわざわざ取毀すではなく／全く見向かないもののように／見受ける吾々は日常「いら／ぬものは捨てる」という言葉を／よく耳にするそれはたしかに／よい言葉だとおもう。／積んで積んで積む、捨てて捨てて捨て／るそれは時と場合を考え／とり混ぜて行方よい結果を見／るであろうか十年のこして猶のこしておきたいものは少く五十年百年残して猶のこしておき度も／のは一層少なく千年のこし／永久にのこしておきたいものは／極めて稀でありそれは社会／と国家とかが保存の方法を／工夫するであろうそれは餘程／優れたものか餘程特異なも／のに限られている。要するに／「のこす」と云うことにあまり／深く氣をとられずこしらえる／ということに多く心を用ひるの／がよさそうであるつまらぬものを／こしらへつまらぬものをこしらへ／それを繰返しているのが人間ば／かりでなく鳥や獣の社会でも／そのような氣がする／水は流れて海に入り蒸発して／天に昇り雨となって地に降りま／た流れて海に入る、日は東より／昇り西に入ることを繰返して／いる「何故か」といふ理由は自分／には全く解らぬ。／解らぬままに緩かであれ急であ／れ自分もそれを繰返してい／る。」

この文章は鉛筆で縦線を引いて清書した形で書かれている。先に鉛筆で下書きされていたものとは内容は違う。初めの丸を付けている書き出しの一行は全体の表題であるように読める。

52枚目 最後のページに墨書「大正三年十二月六日雨出発大阪に滞在／九日午後／みどり川丸にて大阪發翌十日／午前六時勝浦着直に新宮／に至り塩崎庄三郎氏方に入る

／大正四年三月四日勝浦發／和歌山市原庄右衛門氏方に／にて止宿、塩崎氏牧野旅館に宿泊同八日。三月二十三日歸宅」「大正四年（二十八歳）」

この覚えによって大正3年末から翌年春の勝浦旅行の日程が明解になっている。「こしらえては捨てる」の文章はこの旅行中に書かれたとを考えてもいいように思われる。

- 9 『勝浦滞在1』 大正3年 23.3×33.2cm 和紙 30紙、右糸綴じ  
表紙（和紙）、墨書「大正三年十二月／木本新宮勝浦風景」「寫生帖大正三年冬十二月描き印空外」  
裏表紙（和紙）、墨書「大正四年」「大正／四年／春帰京／紀州新宮にて作之」  
2枚目 墨書「三輪崎にて」「12月13日」の漁船墨淡彩写生。  
4/13枚目 墨書「木の本町朝」「木本地蔵岩屋」「木の本裏町」「木の本の入口」「獅子岩」「正子の岩や」「をなか餅屋のきじ猫「鶴殿」など木の本町での墨淡彩写生。  
14枚目 墨書「成川の夕」の舟溜まり風景墨淡彩写生。  
15/16枚目 墨書「1月6日」の杉墨写生  
18/21枚目 墨書「1月29日」の田園風景墨淡彩写生  
22枚目 花瓶・りんご・みかんの静物着彩写生  
23枚目 墨書「ロダンの素描」の裸婦模写  
24/26枚目 墨書「2月22日／勝浦」海岸の細密な着彩写生二図  
30枚目 墨書「原正氏の宅にて 2月20日寫」の和船模型の模写墨淡彩  
この年12月半ばに勝浦に滞在した時のものだが、二ヵ月の長期間に使用されているのは、別に市販のスケッチブックを用いていたことにもよるのだろう。三輪崎は現在の新宮市にあり、成川は少し離れた三重県紀宝町にある。

- 10 『勝浦滞在2』 大正4年 20.5×14.7cm 洋紙 55紙、右綴じ  
表紙（洋紙）、鉛筆書「寫生帖／大正四年二月／星野空外」  
裏表紙（洋紙）、墨書等なし  
1枚目 鉛筆書「2月17日／勝浦にて」のサメ鉛筆淡彩写生。  
2/7枚目 2月17日の太地の漁港、漁村など鉛筆着彩写生7図。  
8/13枚目 2月18日の井田村の風景鉛筆着彩写生8図。  
14/25枚目 2月20日の天満の風景鉛筆着彩写生15図。  
26/30枚目 2月22日、場所記名なし、農作業、水汲み、窯場で働く人物、海岸風景など鉛筆淡彩写生8図。  
35枚目 2月24日の字久井の風景鉛筆淡彩写生。  
52枚目 鉛筆書「田辺／3月4日」の風景鉛筆写生。ここまで那智、浦神を巡っての風景の鉛筆写生がある。この日は京都に帰る途中の写生であろうか。  
54枚目 鉛筆書「東牟婁郡字久井村大字字久井／原正組事務所／魚澤松太郎」「東牟婁郡／勝浦町／中村熊市」「絹本／尺三／三條御幸町／英正堂」、同裏の鉛筆書「瀬藤紋藤様／勝浦町瀬登桂藤様／森宅塩崎人重彦様」「南海の久しき恋も醒めたれば／次の日我は何を求めん」（線で上から抹消されている）  
55枚目 鉛筆書「東京神田区佐久間町四丁目二十三／日角社 素木しづ」、他に日付と対照した2や3の数字の書き込みがあるが意味は不明  
紀州那智勝浦に滞在した時のもの、井田村は少し離れた現在の三重県紀宝町にある。別の寫生帖に原正宅にてという書き込みがあるので、つながりは不明だがそこにも逗留していたのかも知れない。そうして一日は井田村を訪れたりしながら、勝浦周辺の海や村の風景を寫生したも

のと思われる。また抹消された和歌は、女性に対するものか、勝浦の自然に対してのものか、いずれにしても2月24日以後の写生にはそれまでの熱気が薄れたような印象もあり、何らかの心境の変化があって帰京へと促されたのかもしれない。

- 11 『新宮風景』 大正4年 20.5×14.5cm 洋紙 27紙、右綴じ  
表紙(洋紙)、鉛筆書「写生帖／大正四年二月／星野空外」  
裏表紙(洋紙)、墨書「新宮風景」、反古紙で背部分を補修  
1/2枚目 見開きで乳母車を押す男女を点景に描いたペン着彩の風景、鉛筆書「2月5日」  
以下はペンではなく鉛筆淡彩によるほぼ見開きの風景写生が続く。  
8/9枚目 鉛筆書「2月／7日／新宮／駅前」の鉛筆淡彩写生  
12/14枚目 墨書「大正4年2月9日／三好楼にて會合記念」としてそこに集まった人たちの署名がある。  
15枚目表 鉛筆書「成川／2月13日夕」の風景鉛筆淡彩写生  
21枚目裏 鉛筆書「2月／13日」の風景鉛筆淡彩写生  
25枚目裏 鉛筆書「2月／16日」の鉛筆淡彩風景写生  
「三好楼にて會合記念」の署名がある4ページは写生帖に書くのは本意ではなかったのか、ページが開かないように薄く糊止めをしたままに残されていた。写生帖の体裁上は『勝浦滞在2』と同じもの。
- 12 『道成寺模写・那智』 大正4／6年 24.7×33.5cm 和紙 73紙、右糸綴じ  
表紙(和紙)、墨書「大正四年の冬二十八歳／安珍清姫繪卷模写／那智風景」「写生帖空外」  
裏表紙(和紙)、墨書「大正四年」  
1/7枚目 武者絵など古画の墨模写。  
8/12枚目 聖徳太子図の墨による模写。  
14枚目 墨書「大正4年11月」の弘法大師筆風信帖の臨書。  
15/35枚目 日付は不明であるが、道成寺縁起絵巻の着彩模写が17図ある。異本を見たのかもしれないが、道成寺縁起絵巻の模写としてはかなり主観的に写しながら、安珍と清姫のドラマチックな場面をとらえて物語への印象を残している。  
38枚目 墨書「6月3日」のあざみ着彩写生。  
41枚目 墨書「6年1月15日／那智山／亀井屋」の裏庭墨淡彩写生  
42枚目 墨書「1月18日／那智山にて」の杉着彩写生  
45/46枚目 墨書「大正6年」「1月19日」の那智の滝着彩写生  
60/61枚目 墨書「大正6年1月20日」の那智山の着彩写生  
65枚目 墨書「大正6年2月2日」の那智の滝の遠景着彩写生  
68枚目 墨書「2月11日／三重縣井田村にて」の山村風景着彩写生  
終りに白紙4紙あり。後半は那智に旅をした時の細密な風景写生が集中している。大正4年の使い始めが後半6年になっているのは、旅に際して使い残しものを持って出たものか、後日誤って同じ写生帖として綴じたものかは、不明である。
- 13 『塩津写生1』 大正5年 19.3×13.4cm 洋紙 54紙、右糸綴じ  
表紙(洋紙)、墨書なし、中央に後髪の女性頭部が逆様に墨で描かれている。  
裏表紙(洋紙)、裏表紙裏に墨書「星野空外／大正五年五月」  
1枚目 沖縄風俗の女性の鉛筆淡彩、鉛筆書「5年／5月17日」  
他にも同様のもの三図あり。

- 9 枚目裏 鉛筆書「北岡のおじさん」の座す男性人物鉛筆淡彩写生  
 10枚目表 鉛筆書「2月26日／御坊／しほや村」の風景写生  
 11枚目表 鉛筆書「5月30日」のあざみ鉛筆淡彩写生  
 15/16枚目 鉛筆書「田辺」「印南」の風景鉛筆淡彩写生  
 21枚目裏 鉛筆書「6月5日」の庭先の写生  
 35枚目 鉛筆書「鹿の子」「君千代」「小鹿の子」「夏見さんの奥さ  
 38枚目 鉛筆書「7月4日／菌町」の鉛筆写生  
 39/42枚目 墨による半裸の女性人物、顔など三図。

終り頃の数枚に東京の国華社の住所などの覚えや俳句、「捨て所にも困る自分の身一つ何／うなつたとて構ふものか」「随存する運命に生れついて居るのなら随存したとて好いでは有りませんか」「我は近々大々出世する／母は一時たりとも我の帰る事を希望せず／兄は我の一時帰る事を希望せり／年内は東京へ行く事悪し」などの鉛筆書きが数箇所ある。最後のページには「星野先生此を拾いました／もう返しませんよ」という別の人による書き込みもある。半裸の女性スケッチがあつたり、女性たちの顔の写生があつたりで全体の雰囲気はどこか艶っぽい印象がある。一方で自分の将来の身の振り方に悩んでいる様子もあり、空外の青春像を垣間見ることができるノート型の写生帖になっている。

- 14 『塩津写生2』 大正5年 19.3×13.4cm 洋紙 60紙、右糸綴じ  
 表紙（洋紙）、裏表紙（洋紙）とも、墨書なし。体裁は前出の『塩津写生1』と同一のもの。  
 1/37枚目 年や日付などの書き込みはないが、塩津港の漁船、働く人々、家、人物など点景風な鉛筆淡彩スケッチが続く。画卷と同じ構図もあり、明らかに画卷のための写生である。  
 38枚目表 鉛筆書「◎お寺の右の家組合せの訂正／お寺の前の家小さくする工夫は／ないだろうか」「舟の写生／三の巻右へ二しきり廣げる／工夫」  
 38枚目裏 鉛筆書「四の巻右下の家とりの○の工夫／同所樹木の寫生／半紙のけい引」「下段三つめ（家の細部の書き込みがあり）は？」「上段五の（屋根の図があり）のひづみ？」  
 40枚目表 鉛筆書「四巻近景の樹木」「レイ明／涼風／朝涼／朝和／杲日／塩津港の一日」  
 41/60枚目 所々に帆掛け船や屋根、樹木などの鉛筆写生。  
 日付はないが、大正5年の画卷の制作ノートの性格をもっているものと言える。メモには三巻四巻の言葉も見られるのが、初めにはそのような構想もあったのかもしれない。また全体の表題を考えたらしいメモからは、塩津港の一日にしようとした様子もうかがえる。
- 15 『紀南御坊』 大正5年 20.8×15.0cm 洋紙 24紙、右綴じ  
 表紙（洋紙）、墨書「寫生（紀南御坊）、NoteBookの印刷文字」  
 裏表紙（洋紙）、墨書「塩津港／雨蛙」「大正五年七月／星野空外」  
 裏表紙裏に墨書「大正五年七月／星野空外」  
 2 枚目裏 鉛筆書「ほしのはんのかほとなすび／大川内／てるか」とあり、鉛筆で男性の顔とナス、前後のも女性の顔のいたずら描きがある。  
 3 枚目裏 鉛筆書「てるか」の女性座像鉛筆スケッチ。他に同じ女性の鉛筆着彩の顔二図。  
 6 枚目欠損  
 7 枚目表 墨書「7月17日夜／道成寺詣での帰途／にて」の満月夜の風景鉛筆着彩。  
 8 枚目表 鉛筆書「7月12日」の雨蛙鉛筆淡彩写生、計三図。  
 9/13枚目 半裸の横たわる女性、乳房、肩などの鉛筆着彩七図。

16枚目表 鉛筆書「箕嶋の山／7月／26日」の鉛筆淡彩写生。  
以下鉛筆淡彩の風景写生「はたをる家」「塩津港の一部」など五図、女性人物一  
図。

大正5年7月紀南御坊に滞在して、塩津港の画卷を制作する機縁となった写生帖のようである。  
この時の写生を新聞に連載した「御坊町の思い出」には、道成寺での感想や老松座の人形芝居、  
池田屋のおかみさん、「おてい」という名の女性と親しくなった様子などが書かれている。

- 16 『塩津写生3』 大正5年 24.5×33.0cm 和紙 46紙、右糸綴じ  
表紙(和紙)、墨書「紀州塩津にて作之／空外描き印空外」「寫生帖」／大正五年／の夏空外  
朱角方印)  
裏表紙(和紙)、墨書「添景人物／網／船」「大正五年八月」  
5/18枚目 塩津港の家、船、野原など点景風な墨、墨淡彩の部分的な写生、墨書7枚目「8  
月16日」、9枚目「三巻／右の港／樹木の背後」  
19/25枚目 墨書「鉢木、雅邦」「雅邦 布袋川渡」「雅邦 水墨山水」「蕪村 緑陰書屋」  
などの縮図11図。  
29/33枚目 墨書で「長唄越後獅子」や端歌、新内、伊豫節、甚句、都々逸、追分節などの歌  
詞が書かれている。  
38/44枚目 墨書で漢詩の書き込みが続く。  
塩津港の写生は前半三分の一ほどで、後半はメモ書きの写生帖。
- 17 『塩津画卷1』 大正5年 476.5×24.4cm 和紙 18紙 卷子  
第1紙 右上に赤鉛筆「はじめ」の書き込み、右下に朱角方印空外画、墨書「大正5年の  
／夏8月6日より／塩津港の／写生を初む」の墨淡彩草むら写生。  
第3紙 右上墨書「紀伊 海 郡／塩津港の寫生／大正5年8月」朱角印空外、右下墨書  
「東港」の家の屋根俯瞰構図写生。  
第5/8紙 7紙墨書「東の波止付近」の港風景写生、縦横の朱線を引いている。朱角印空外。  
第9/11紙 別々の写生をつないだもの。
- 18 『塩津画卷2』 大正5年 435.5×24.4cm 和紙 19紙 卷子  
第3/10紙 第5紙右下墨書「8月9日」、第6紙左上舟の部分に墨書「8月10日」(後から  
滞船の部分を描いたというふうにとれる)中央に墨書「みかん船」、第7紙左下  
墨書「8月6日」朱角印空外。中央に墨書「少しく上に／15日」「塩津波止場」、  
第9紙左下墨書「8月7日／8月8日／塩津村全景」、朱角印空外。この画卷の  
中心となる塩津港の細密な墨着彩写生が俯瞰的な構図でまとめられている。  
第11/18紙 細かな紙継ぎのある村の屋根のいくつかの写生。  
第19紙 墨書「徳本聖人／舊跡／極楽寺／空外描き印」、朱角印空外  
第20紙 墨書「大正5年8月寫生／星野空外」、朱角印空外。「小学校道」  
塩津港を写生した画卷1と同じ時に集中的に村の家並みをまとめきっている。港の部分はそれ  
から丁寧に描き加えているようである。密度の高い写生画卷になっている。
- 19 『塩津春桜花』 大正6年 24.4×32.2cm 和紙 65紙、右糸綴じ  
表紙(和紙)、墨書「大正六年三月／塩津桜」「寫生帖六年の春」  
朱角方印空外、裏表紙(和紙)、墨書なし。  
3枚目 墨書「3月3日寫」の花瓶に挿した水仙の墨淡彩写生

5枚目 俳人千代女についての墨書20行  
 6/16枚目 塩津での梅の樹木の墨写生、途中に女性の顔二図あり。  
 17/21枚目 桃山風俗女性の墨による模写など。  
 22/50枚目 山桜の墨、墨着彩写生が集中的に続く。26枚目墨書「4月23日」、40枚目墨書「4月28日／平野にて」、42枚目墨書「4月30日／衣笠村／にて」などあるので京都市内を歩いて写生した様子がうかがえる。桜花だけを大きく描いたり、マスを引いたりもしているので、制作のための写生かもしれない。  
 51/52枚目 風神雷神の墨淡彩模写  
 以下浮世絵の模写、山桜一図、スカンポの写生などがある。前半は塩津での写生だが、後半は京都での桜花の写生が中心である。密度の高い桜花写生になっている。

20 『手記帖』 大正6年 19.8×14.5cm 洋紙 43紙、右綴じ  
 表紙（洋紙）、墨書「手記帖／大正六年／五月／空外描き印」  
 裏表紙（洋紙）、墨書なし。表紙裏に空外による梅花と女の顔装丁  
 1枚目 ペン書「まことに生くべきもの、みぞ／生きゆく／死者とたゆとふ者とは／吾に用なし」  
 以下は空外自身も手記帖として始めた冊子であったせいか、女性の顔数人の鉛筆写生がある他は鉛筆による簡単なスケッチが見受けられる程度である。1枚目の空外のこの頃の気概を現す言葉が印象的な手記帖である。

21 『衣笠樹木鳩』 大正6年 33.0×24.0cm 和紙 47紙、右糸綴じ  
 表紙（和紙）、墨書「写生帖六年の夏」、朱角長方印空外  
 裏表紙なし、最後紙の裏に墨書「大正六年七月」  
 2/3枚目 墨書「7月12日／衣笠村にて」の墨淡彩樹木写生、以下同じ関連の写生が所々に続く。20枚目墨書「7月30日」  
 22/26枚目 山鳩の墨淡彩写生。  
 31/47枚目 墨による簡単なムクドリの写真。

22 『蕪干鳥賊等』 大正6年 33.0×24.0cm 和紙 46紙、右糸綴じ  
 表紙（和紙）、墨書「大正六年八月」／「写生帖六年八月／十四日」、朱角長方印空外、裏表紙（和紙）、墨書なし  
 9/12枚目 山鳩の墨淡彩写生。  
 13/21枚目 蕪やクワイの丹念な墨着彩写生。14枚目墨書「7年2月1日」  
 24/26枚目 タコの墨淡彩写生。26枚目墨書「4月2日」  
 27/28枚目 イカの墨着彩写生。28枚目墨書「干鳥賊6月3日寫」  
 29/30枚目 蕪の墨淡彩写生。30枚目墨書「12月5日夜」  
 31/32枚目 水引草墨淡彩写生。31枚目墨書「大正10年10月10日寫」  
 33枚目 ここから最後まで所々に古画の墨模写が続く。  
 42枚目 墨書「高野長英像」の墨着彩模写。  
 この写生帖は、表紙の墨書は大正6年になっているが、写生帖として和紙を糸綴じて使い始めようとした時の墨書のように、実際の使用は7年から10年前後までの間になっている。

23 『夏草水蓮』 大正12年 32.5×22.5cm 和紙 19紙、右綴じ  
 表紙、墨書「第拾号」、裏表紙、墨書「大正十二年」

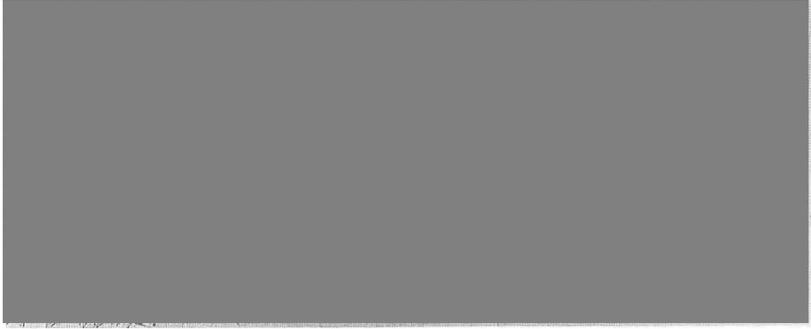
- 1枚目 見開きでタデなど夏草の墨淡彩写生、5枚目まで同じく墨淡彩の夏草、水蓮の写生、5枚目に墨書「8月7日」。
- 8枚目 10枚目まで見開きで伊吹山に自生するという「るりとらのお」の野草の花の細密な墨着彩写生
- 12枚目 14枚目まで見開きで土に生える雑草の墨淡彩写生
- 15枚目 見開きで鉛筆による鳥と写生の夏草類を配した草稿案
- 17枚目 見開きで水草水蓮の墨淡彩写生、墨書「8月7日」
- これまでのような自分で和紙を綴じて作成した写生帖ではなく、昭和期に多く用いられるようになる鳥の子紙製の市販の写生帖である。制作の構成案があってそのための取材を意識した写生になっているようである。

- 24 『大判写生1』 大正12年 54.0×39.5cm 和紙 32紙、右糸綴じ ・
- 表紙（和紙）、墨書「茶の花真菰ドーマン笹藻虎の尾／人形鹿」「写生帳大正十二年夏」、裏表紙（和紙）、墨書なし
- 表紙裏及び裏表紙裏に墨画人物
- 2～3枚目 墨書「11月27日」の茶の花墨淡彩写生
- 4～14枚目 真菰の墨淡彩写生
- 18枚目 墨書「大正11年7月11日」の虎の尾墨淡彩写生
- 19～20枚目 墨書「5月19日寫いくら」の人形墨着彩写生
- 22～24枚目 鯉のぼりの墨着彩写生、24枚目に墨書「紙製の鯉幟小学児童の手工／鯉の黒の部分の鱗と胸鰭腹鰭／吹流しのいろ紙は児童に貼付け／させるものらしい。／（鯉の腹鰭は少しく下部になり過ぎ／且つまちがへて逆に／貼ったのであらふ。）」
- 25枚目 ここから最後まで鉛筆と色鉛筆による子鹿雄鹿の顔、腰部、足、全体など20図余りが続いている。書き込みはない。
- この写生帖は和紙を綴じた手製のものだが、かなり大判の仕立てになっている。大正11年のものもあるが、それ以外は大正12年の夏以後の写生と思われる。人形は女の子の京人形、鯉のぼりは本画に近いほどに着彩されている。



17 『塩津画卷1』  
大正5年 塩津港の一日

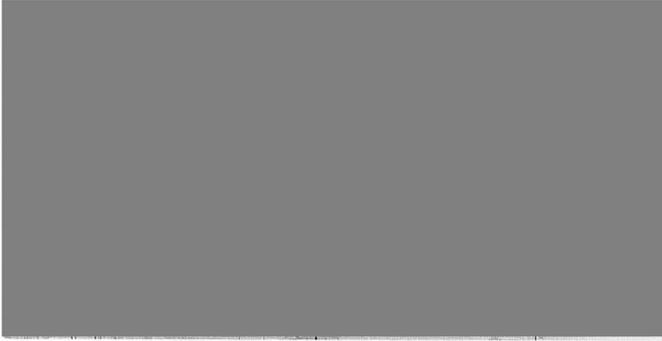






18 『塩津画卷2』  
大正5年 塩津港の一日





1 『文展作構想』 大正元年 「春」小下絵



2 『文展作写生』 大正2年 山羊



3 『桃花山羊』 大正2年 桃花



4 『挿絵女性』 大正2年 人物



5 『古画模写・新宮』 大正3年 淡輪風景



5 『古画模写・新宮』  
大正3年 ムンク作品の写し



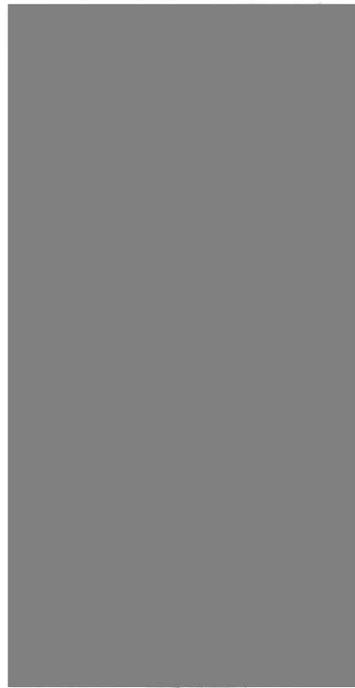
9 『勝浦滞在1』 大正3年 勝浦風景



10 『勝浦滞在2』 大正4年 井田村



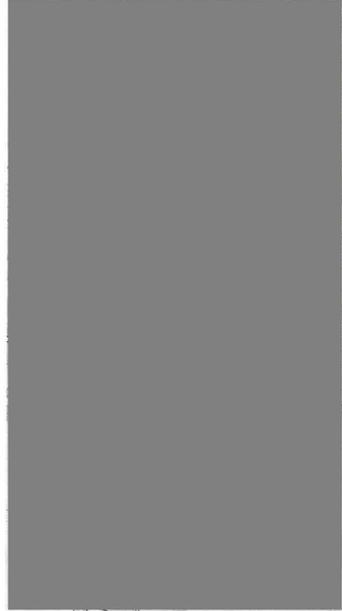
12 『道成寺模写・那智』  
大正4／6年 絵巻模写



12 『道成寺模写・那智』  
大正4／6年 那智滝



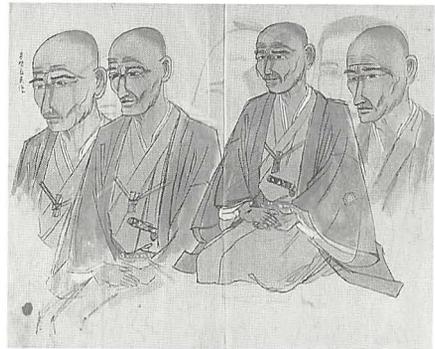
15 『紀南御坊』 大正5年 池田屋のおかみ



19 『塩津春桜花』 大正6年 桜花



22 『燕千鳥賊等』 大正6年 山鳩



22 『燕千鳥賊等』 大正6年 高野長英像模写



23 『夏草水蓮』 大正12年 夏草



23 『夏草水蓮』 大正12年 るりとらのお